

土浦亀城邸（第二）における台所の設計とその思想

Design Characteristics and Transition of the Kitchen in TSUCHIURA Kameki House

安田研究室 19M50545 松永 香央里 (MATSUNAGA, Kaori)

1. 序 土浦亀城邸（第二）は、1935年に創建された近代住宅である（図1）。その台所空間は、土浦亀城・信子夫妻が共同で設計しており、アルミ製のシンクの導入や収納棚、ガスコンロの設置など、当時の日本においては先駆的な空間であったと言える。現況の台所は度重なる修理によって意匠が改変されており、本住宅の保存修理に伴い創建当初の状態を复原する上で、当時の仕様や改変履歴と土浦夫妻の思想との関係を位置付けることが求められている。本研究では土浦邸の台所空間について実測・解体調査及び文献から創建当初の状態とその変遷を整理することで、竣工当時土浦夫妻がめざした生活環境や設え、その表現と思想を明らかにすることを目的とする。

2. 分析資料

2-1. 土浦邸の住み継ぎについて 土浦邸は創建当初より土浦夫妻が暮らし、1955年より秘書として中村常子氏が同居することとなった。1996年に土浦亀城が、1998年に土浦信子が他界した後、20年に亘り中村氏によって住み継がれ、2018年に個人に継承された。2018年時には土浦夫妻が用いた物品に加えて、直前まで中村氏が用いていたものが混在している。

2-2. 保存修理に伴う台所の調査 土浦邸の保存修理に伴い、遺された家財道具が回収された。回収前には当時使われていた状態で撮影がなされた（図2）。その後、2019年4月～9月に建物の実測が行われ、2021年3月～7月に創建当初の色彩を特定するこすり出し調査が、2021年9月～翌年2月に内装の解体調査が、2022年8月～翌年2月に外装、構造体及び基礎の解体調査がなされた¹⁾。

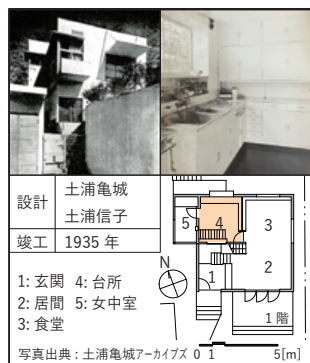


図1 土浦亀城邸（第二）概要



図2 調査写真

2-3. 文献資料について 土浦邸を含む近代住宅の台所に関して11件の文献において言及されており、それらを1935年の土浦邸の発表当時の言説と戦後の言説に大別した（表1）。戦前には主に『婦人之友』や『糧友』などの婦人・生活雑誌での発言が多く、土浦邸以外の近代住宅の台所に関する言及も見られた。戦後にはインタビュー形式で当時の様子や使い方を説明する文献が見られた。

3. 土浦邸の台所の特徴とその変遷

3-1. 内装仕上の変遷 各調査及び文献の情報から内装仕上の変遷について検討する（表2）。

天井及び壁について、仕上材の変化は見られなかったが、天井の塗装が灰黄色へ、壁の塗装が白色へ変更された²⁾。床仕上について、2019年は緑色のPタイル仕上であったが、創建当初は檜材フローリングに赤褐色のマッシュク又はミネライト塗装仕上であったことが分かった³⁾。そのため設計時は台所に隣接する食堂から女中室までフローリングが続き、一体的な仕上としていた。しかし、台所のみ水回りの室であることを考慮して防水性の高い塗料に仕上を変更したと考えられる。その後、一部床の不陸に伴って傾斜を調整するため、合板が追加された。シンク及び調理台の仕上について、創建当初にはステンレスは高価であり、施工が当時の技術では困難であったことからアルミニウム板で仕上げられていた。その後、耐久性の問題からシンク部分はステンレスに変更された⁴⁾。東側のワークトップはアルミニウム板が現存している。食器棚及び戸棚について、床及び壁同様に塗装色の変更がなされた²⁾。食器棚は黄色へ、戸棚は白色へ変更された。

表1 近代住宅の台所に関する文献リスト

	No.	発行年	文献名	発言者		内容
				信	亀	
戦前	1	1935.03	『新建築』「第二の自宅の建築」		○	T
	2	1935.03	『婦人之友』「私共の家」	○		T
	3	1935.05	『婦人之友』「台所の設計 器具の工夫」	○		T
	4	1935.10	『糧友』「台所開放の會」	○		T
	5	1935.12	『今日の住宅：その健康性と能率化への写真と解説』	○		T
	6	1937.03	『婦女界』「僅かな費用でできる 押入・戸棚の整理改造法」	○		G
	7	1938.03	『婦人之友』「台所問答」	○	○	G
戦後	8	1950.10	『婦人之友』「新しい住宅の美しさとは？」	○		T
	9	1989 秋	『すまいるん』「昭和初期に新しい木造住宅を拓く」	○	○	T
	10	2001.03*	『ビッグ・リトル・ノブライトの弟子・女性建築家土浦信子』	○		T
	11	2013.03	『住宅建築』「住み継がれるモダニズム建築」		○	T

凡例) 信：土浦信子 亀：土浦亀城 T：土浦邸に関して G：台所一般に関して *1987年のインタビューを記載

3-2. 台所設備の変遷 ガスコンロは創建当初、シンクと同じ高さ
に設置されたが、その後製品を変更したことによりガスコンロ部
分のみ高さが変更された。換気扇は臭気抜きとして設置され
ていた。また、創建当初はガス式の冷蔵庫が用いられていた。

3-3. 収納棚の変遷 各収納棚を方角とワークトップの上下に
分けて分類した(図3)。このうち収納棚の設えについて
変化のあった部分A~Dについて検討する。

A 北面出窓下の収納棚奥の壁について、写真から創建
当初は木板であったことが推定できるが、1989年には、
手元の採光の確保のためにガラスを用いていると説明され
ており⁴⁾、竣工後のいずれかの時期に仕様変更された。
B ハッチについて、創建当初は料理などを出し入れするた
め台所と食堂の間に小さな引き戸が設けられたが、2019
年の実測時には引戸の開閉が困難になっており、実際には
使用されていなかったと考えられる。**C** 引出式まな板
について、創建当初はパンや肉類などの使用用途に分けて
ビルトイン形式の4つの引出式のまな板が設けられたが、実
際には日本の湿気や調理法には適応せず使用されなかつ
たと言及されており⁵⁾、2019年の実測時にも引出すこと
は不可能であった。**D** ガスコンロ横の収納棚について、創建
当初は収納棚は設けられていなかったが、その後の設備
の変更に伴って引出式の収納棚が追加され、フライパン等の
調理器具が備えられるようになった。

4. 土浦夫妻の台所空間に関する思想 土浦邸及び当時の
近代住宅の台所空間に関する言説を時代ごとに抽出した
(図4)。平面計画に関しては、室の広さと形状について
言及されており、能率性や使用人数を想定して台所は狭
い空間でも成り立つと述べている。設えに関しては、能
率的な収納や配膳のためのハッチ、引出式まな板等の近代
的な生活における収納棚等の工夫や反省について言及し
ている。設備に関しては、当時一般家庭にはあまり普及
していなかったガスコンロ、換気扇、冷蔵庫の導入や使い
方を説明している。仕上に関しては、シンク・調理台及び床
の仕上、色彩について述べられており、水や油を拭き易
い仕上の採用等、調理空間の衛生を意識した新材料の試
行に積極的な姿勢が見られた。

発言数に関して、亀城は2件、信子は7件の文献で言
及しており、自邸の台所の設計時には信子の思想が強く
反映されたことが分かる。また、信子は能率的な動線や
生活を考えた設え等の家政学的な点から、亀城は新材料
の試行等の工学的な点から言及しており、自邸の台所の
設計時には担当する分野を意識的に分けたと考えられる。

表2 内装仕上の変遷

	1935年(創建当初)	2019年(実測時)
天井	仕上 色 ■ 木毛繊維板水性塗装*2 ■ 22-87C(文献の情報なし)*3	木毛繊維板水性塗装*2 ■ 25-90C(灰黄色)
壁	仕上 色 ■ フジテックス水性塗装(一部白色タイル)*2 ■ 21-75B(文献の情報なし)	フジテックス水性塗装(一部白色タイル)*2 ■ 15-90A(白色)
床	仕上 色 ■ フローリング/マステック又はミネライト塗装*1 ■ 09-40H(赤褐色)	Pタイル(一部合板を追加)*2 ■ 39-80D(緑色)
シンク	仕上 ■ 7#ミニム板*1	ステンレス*2
調理台	仕上 ■ 7#ミニム板*1	7#ミニム板*2
食器棚	仕上 色 ■ 木*1 ■ 17-80D(アイベリ色)	木*2 ■ 25-80P(黄色)
戸棚	仕上 色 ■ 木*1 ■ 17-80D(アイベリ色)	木*2 ■ 19-92B(白色)

(図註) *1 文献 No.4 より情報抽出 *2 実測・解体調査から判明 *3 色はこすり出し調査より情報を抽出

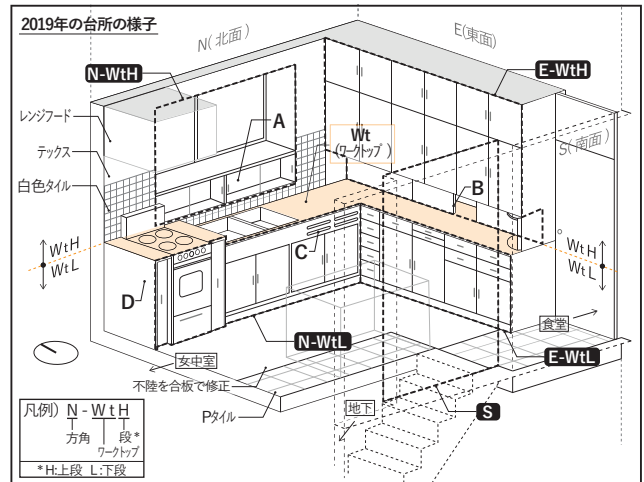


図3 収納棚の分類と造作家具の名称

	戦前	戦後
〔平面計画〕	室の広さと形状(3件) 「小さくて間に合わせようと思えば一間の押入の中でもすみますものね。」[3] 「階段がありますからそんなに広くないのです。でも少人数ですからこれで充分なのです。」[4]	能率的な収納(1件) 「コブのきれいな並べ方など子供の時からしつけない室内装飾の基本でしょう。」[8]
〔設え〕	ハッチ(1件) 「(…) 食堂と臺所との間にはハッチを設け、配膳臺からすぐ入室にお料理が運ばれるやうになってあります。」[2]	ハッチ(1件) 「工夫した割に使わない。」[9]*1
〔設備〕	引出式まな板(2件) 「(…) 魚肉類、野菜類、パン類等の用途に応じて使い分け出来るやうにして、場所は流しの傍に差し込むやうに造りました。」[5]	引出式まな板(1件) 「アツクで一般的なパン切り用の引出式まな板を7#にして、パン、魚肉類、野菜類とそれぞれ分けて使えるようにしたのだが、日本の気候と調理法には合わず、あまり使われなかった。」[2013.02住宅建築]*2
〔仕上〕	ガスコンロ・換気扇・冷蔵庫(4件) 「私の家では電気7#をつけました。」[3] 「パンや果物等は冷蔵庫を使用しています。」[4] 「上に設置してあるのは電気臭気抜きです。」[4]	ガスコンロ・冷蔵庫(1件) 「台所には7#製のガスレンジを入れました。それから私の叔母が、ガスの冷蔵庫を買ってくれたの。」[10]
	シンク・調理台仕上(2件) 「(…) 調理臺や配膳臺の上は全部7#ミニム板を張りました。」[4]	シンク・調理台仕上(1件) 「(…) 7#はやわらかいですが作業が非常に楽だから(…) だけど、あまりもたないです。だから流しの部分だけはまたステンレスに代えちゃいました。横の台の部分だけが残っています。」[9]
	床仕上(3件) 「床はマステックといふのにしました。(…) 水や油を流しても直ぐ拭けばよく、大へん気持ちよございます。」[2] 「臺所床仕上げのマステックは(…) リリウムに比較すると、足ざわりはや、硬いのですが艶があり、油拭きを必要としないのが宜しいやうです。」[7]	色彩(1件) 「明るく美しく、楽しい場所にするのが大切です。(…) ベントのところは7#ベリベリ材、床の濃い色のマステックで、温かい感じをさせるやうにしました。」[3]
凡例	■ : 土浦亀城の言説 無色 : 土浦信子の言説 □ : その他(*1 写真のキャプションから引用 *2 田中厚子氏による文章) [] : 内は文献番号(表1参照)	

図4 土浦夫妻の台所空間に関する言説例

5. 収納品にみる棚の設計の特徴 台所における収納品について、1935年の創建当初と2019年の家財道具回収前の状態を比較し、収納棚の設計の特徴を検討する(図5)。

5-1. WtLの収納物の変遷 E-WtLについて、いずれの時代も**棚13,14**はカトラリーや調理器具、乾物やナプキンが棚ごとくに収納されており、能率的な配置が当時から実現されていたと考えられる。**棚15**には創建当初、鍋類が配置されていたが、現況⁶⁾では空箱や保存用の缶詰等が置かれている。生活の中で空箱等が増え、収納場所が足りなくなってきたと考えられる。E-WtL側のN-WtLとの入隅付近に位置する**棚12**に関して、創建当初の情報は特に見られなかったが、現況では工具等の生活用品が置かれていた。N-WtL側には同じ高さに**C**引出式まな板が設置されており調理の際には干渉してしまうため、調理関連の物品は置かれなかったと考えられ、設計段階から動線を想定して計画されたものと考えられる。

N-WtLについて、**棚4,5**における創建当初の情報は発見できなかったが、現況は鍋類や調味料の瓶が配置されており、当時もシンク下の大きなスペースを同様に使用していたと考えられる。また、**棚3**ガスコンロ横の収納に関して、創建当初には収納棚は設けられていなかった。現況ではフライパンや調理器具が吊るされた収納棚が配置されており、収納物の増加やコンロ付近に鍋を置くため、能率性を考慮してガスコンロの交換時に設計されたと考えられる。

5-2. WtHの収納物の変遷 E-WtHについて、創建当初には左から**棚7**日本食器、**棚8**茶道具、**棚9**洋食器が配置され⁷⁾、食堂との動線を意識して**B**ハッチを設けたために客人に提供する茶道具の位置をハッチ直上に設定していたと考えられる。現況では茶道具と洋食器の位置は反転し、左から日本食器、洋食器、茶道具の順で配置されていた。戦後の文献ではハッチ部分はほとんど使われていないことが示唆されており、現況では食堂への動線は主に右手扉となり、その近くに茶道具を置くように変更したと考えられる。また、**棚10**は創建当初の雑誌に掲載されている写真より、皿や箱など雑誌ごとに異なる物品が置かれており、特定の使い方の記載は見られなかった。現況では収納物の増加に伴って調味料が置かれていた。

N-WtHについて、創建当初には台所を使用しない際になるべく収納外には物を置かないよう計画していたが、現況では洗剤や洗った後の食器を乾燥させるための水切りかごが棚に置かれていた。また、1935年の雑誌発表時に掲載された写真では**棚2**シンク直上の棚の奥は木板で仕

上げられていた。北側に面していることから、冷えた暗い空間を生かして創建当初にはバターや調味料を保存するための光が入らない食料庫の役割を想定していたが、冷蔵庫が導入されたことで機能が変わり⁸⁾、手元の採光のための窓として使われるようになったと考えられる。

5-3. 棚Sの収納物の変遷 創建当初の図面では大きな開き戸による収納棚が計画されていたが、実際には細かく間仕切りのある引戸を有した収納棚が設えられていた。当時の計画では「ソウジ入れ(掃除具入れ)」と記載があったが、現況では保存食が入った瓶や調味料などの掃除用具以外の物品も見られた。これらは前述した創建当初の**棚2**と同じ機能を備えており、**棚S**にこの機能が移ったとも考えられる。

5-4. 収納棚の改良 以上より、土浦邸の台所では創建当初から設え、収納物が共に変化しなかった**棚6,7,11,13,14**、収納物が増えた**棚1,8,9,15**、設えが変化した**棚2,3**が確認できた。土浦信子は1937年に収納棚について、実際の使い勝手に合わせて改造を加えることで非常に便利になると述べており⁹⁾、使い勝手や生活に合わせた変更や改良を当初から想定していた。また、近代化する日本の生活様式に伴って能率的で使いやすい台所を模索する中で、自邸において実験的な引出式まな板の設置や寸法・動線を意識した収納棚の設計を行っていた。実際に、日本の気候や暮らしに合わずに十分に機能しなかった部分があり、生活やその変化に合わせて柔軟に収納物や設えを変更することで、常に高い利便性を維持する意図があったと考えられる。

6. 結 以上、本研究では実測・解体調査から分かった情報の整理と土浦夫妻の言説、家財道具の調査から台所空間や収納棚の設計の特徴とその変遷を分析することで、当時土浦夫妻がめざした生活環境や設えと思想との関係が明らかになった。

註

- 1) 実測調査は、東京工業大学 安田幸一研究室及び山崎鯛介研究室が2019年4月～9月に実施。こすり出し調査は、安田幸一研究室が2021年3月～9月に実施。解体調査は、鹿島建設株式会社/有限会社 後藤工務店/安田幸一研究室/居住技術研究所が2021年9月～2023年2月にかけて段階的に実施。
- 2) 土浦邸の色彩の変遷に関しては、参考文献2)の調査結果を引用した。
- 3) 床仕上げ材のマスクに関して表1の文献No.7にて土浦亀城が詳細に述べており、マスクとはアスファルト性のゴムで、アスベスト繊維等を混合し糊状を呈していると説明している。また、ミネライトに関しては、同誌でマスクの類似品として紹介されている。
- 4) 表1中の文献No.9にてインタビュー形式で創建当初及び雑誌発表時の自邸について言及している。
- 5) 表1中の文献No.11を参照。
- 6) 本研究では、2019年時の家財道具回収前の状態を「現況」として扱う。
- 7) 表1中の文献No.4にて設計時の収納計画について言及している。
- 8) 表1中の文献No.4及びNo.10より、創建当初に冷蔵庫を導入していたと言及されている。
- 9) 表1中の文献No.6にて収納の整理改造法について挿絵を用いて説明している。

参考文献

- 1) 田中厚子：女性建築家としての土浦信子－亀城との協力関係について（日本建築学会大会学術講演梗概集2001.09）
- 2) 長沼徹：土浦亀城（第二）の創建時における内装仕上材の色彩（日本建築学会計画系論文集第88巻、808号、PP.2062-2071.2023.06）
- 3) 井上祐一/小野吉彦：ライト式建築（柏書房2017.07）
- 4) 田中厚子：土浦亀城と白い家（鹿島出版会2014.05）

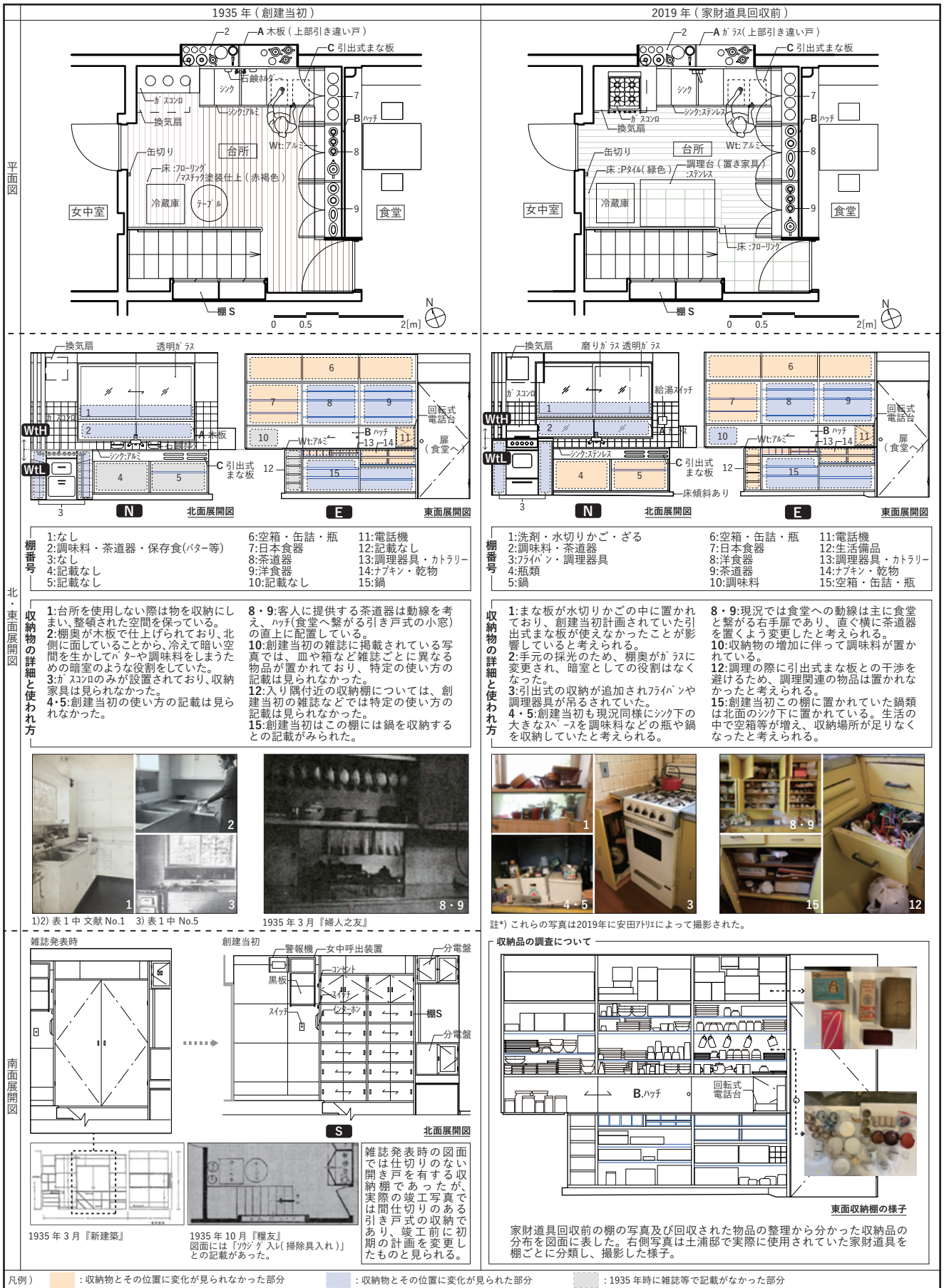


図5 土浦亀城邸台所の平面図・展開図とその変遷